

(4) 低学年ほどやすやすと

かなより早く漢字学習を！

いかがですか。“鳩・蟻・森・池・獵師・鉄砲”などの漢字を幼児に教えてあげられましたか。実験してみれば、子どもがどんなにやすやすと漢字を覚えるかということが、よく御理解いただけると思います。

世の中には、うまそうに見えて食べてみるとまずい物があり、その反対に、まずそうに見えて、食べてみるとうまい物があります。だから、見かけにまどわされて、食べず嫌いになってはいけません。

漢字はむずかしそうに見え、かなはやさしそうに見えます。しかし、実際に条件を同じにして教えてみますと、幼児は、鳩でも蟻でもやすやすと覚えてしまいますが、かなはなかなか覚えません。

わが国の教育界は、明治以来、この“見かけ”にまどわされて、小学校の一、二年生では、かなの学習を主体にして、漢字の学習は多く高学年に振り向けられました。そのため、“学校”という言葉でさえ、社会には実用されていない“がっこう”というかなで読み書きさせられて来ました。

東京都で指導主事として、小学校の教育指導に当たっていた私は、このことに疑問を抱き、一年生に、初めから“学校”という漢字で学習させる実験を試みたくて、昭和28年、小学校の教師になりました。

以来、長年にわたる実験で、一年生は、能力の高い子も低い子

もみな“学校”の方が“がっこう”よりも覚えやすく、読みやすいこと、六年生は年間二百字の漢字学習にも困難を感じているが、一年生は年間六百字の学習にも困難を感じないこと、などの事実を明らかにしました。

これらの事実は、いずれも従来の教育の常識を根底から覆すもので、この事実を知った時には、私自身信じられないほどのものがありました。そこで、小学校の実験をやめて、幼児に漢字を教える実験を始めました。

この実験で明らかになったことは、幼児の漢字を覚える能力は、小学校の五、六年生よりもずっと高いこと、幼児は漢字を覚えることにより、知能が高く、情操が豊かに、判断力が増し、自立心が強まり、対人関係が円満になる、ということでした。

ところで、昭和36年まで、中学卒業までに習得すべき881字の漢字が、36年以降は小学校卒業までと改められ、今はその漢字が996字にふえています。このように漢字学習の重要性は年々強まっていますが、その習得状況は逆に悪化しています。

しかし、理科でも社会科でも漢字がわからなければ学習を進めることが出来ません。小学校の五、六年生から中、高校生にかけて、教科書が読めないために学習についていけない者が七割にも達し、学校嫌いを助長して、それが不良化の最大原因とされています。

これを救う道は漢字力の強化以外にありませんが、今の学校教育には残念ながらその力がありません。